



感染症とたたかう

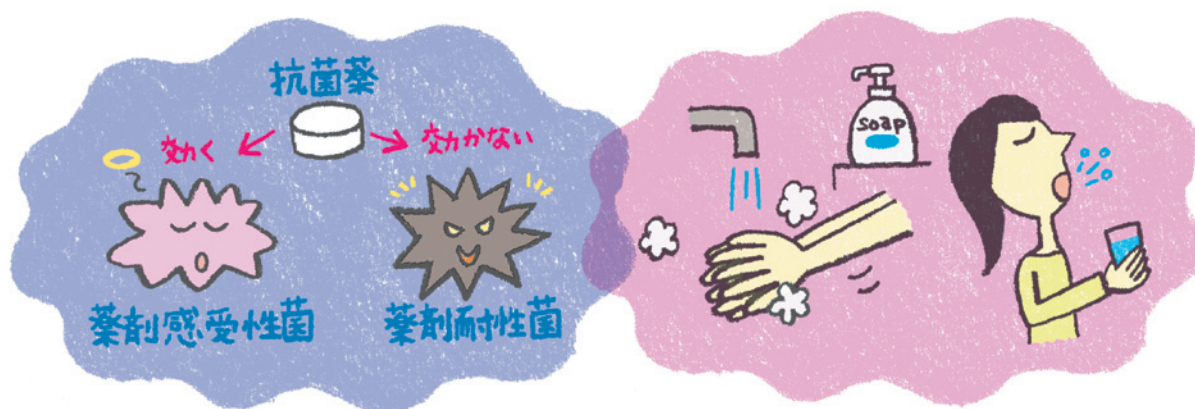
第20号

2017年
7月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

世界で増え続ける薬剤耐性菌 抗菌薬は指示通り飲み切ること



「薬剤耐性菌」という言葉を聞いたことがありますか？細菌による感染症の治療では、原因となる病原微生物を退治するために抗菌薬を使います。この抗菌薬が効かなくなった菌を薬剤耐性菌と呼びます。

薬剤耐性菌の多くは、健康な人にはあまり害を及ぼしませんが、乳幼児や妊婦、病気などで抵抗力が弱っている人、高齢者などに感染すると重くなる場合があります。

抗菌薬の乱用が原因の一つ 多くの風邪に抗菌薬は不要

よく知られている薬剤耐性菌としては、MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）があります。これは「メチシリン」という抗菌薬が効かなくなった

黄色ブドウ球菌です。

黄色ブドウ球菌は、人の鼻の中など、どこにでもいて、私たちの身の回りから取り除くことが難しい細菌です。しかし、健康な人には、ほとんど害がありません。

薬剤耐性菌が発生する主な原因の一つは、抗菌薬が適切に使われていないことです。

感染症の治療には、有効な抗菌薬を適切な量、適切な期間だけ服用あるいは注射することが必要です。ところが、症状が軽くなると、途中で抗菌薬の使用を止める人がいます。そうすると抗菌薬に抵抗力（耐性）のある菌が生き残ってしまいます。

また、決められた量を使用しないと、やはり耐性菌が生き残ってしまいます。医師が処方した抗菌薬は、決められた量を決められた期間、きちんと



と飲み切るようにしましょう。

また、具合が悪いからといって、家に残っている抗菌薬を勝手に飲むことも控えてください。抗菌薬が有効でない病気なのに抗菌薬を飲むことも、耐性菌が発生する原因になるからです。

例えば、ほとんどの風邪には、抗菌薬は必要ありません。風邪の原因の多くがウイルスで、ウイルスには抗菌薬が効かないからです。風邪を引いたときに、抗菌薬が処方されなくても、不安に思うことはありません。

多剤耐性菌が世界的な問題に 感染予防の基本は手洗いとうがい

近年、世界的な問題となっているのが複数の抗菌薬に耐性を持つ「多剤耐性菌」です。一つの抗菌薬だけに耐性がある細菌は、別の抗菌薬を使えば退治できますが、多剤耐性菌では使える抗菌薬の種類が少なくなり、治療はさらに困難になります。多剤耐性菌には、多剤耐性緑膿菌(MDRP)などがあります。

多剤耐性菌の中でもカルバペネム耐性腸内細菌科細菌(CRE)は、人の腸に定着しやすいうえ、

菌を持っているのに症状が出ない保菌者もいます。抵抗力の弱った人にうつり、保菌者から集団感染が発生することもある厄介な耐性菌です。

薬剤耐性菌の感染を防ぐ基本は、ほかの感染症と同じで、手洗いとうがいです。帰宅したときやトイレの後、調理の前などには、石けんでいねいに手を洗ってください。外出から戻ったときにはうがいをしましょう。

地球規模で広がる感染症 人、動物、環境を一緒に考える

耐性菌は世界的な問題になっています。例えば、海外の医療機関で治療を受けた人が、日本の病院に入院したとき、耐性菌を持ち込む例は少なくありません。そのため、病院には感染症対策を行うチームが置かれ、耐性菌が検出されていないかを常にモニターしています。また、耐性菌を発見したときには、直ちに、感染を広げないための対策を立てています。

さらに、耐性菌は、院内感染など医療機関だけでなく、農林・畜産・水産業から環境分野にまで及ぶ問題となっています。

そこで、人の健康と病気を広く理解するために、人だけでなく、家畜や野生動物の健康、環境保全の問題を地球規模で包括的に検討する「ワンヘルス(One Health)」という考え方が提唱されています。

健康に暮らしていくためには、人間は、動物だけでなく、土や水の中にいる微生物とも、ともに生きていくという考え方が必要になってきたといえるでしょう。

次号(2017年8月号)では
「突発性発疹」を取り上げます。